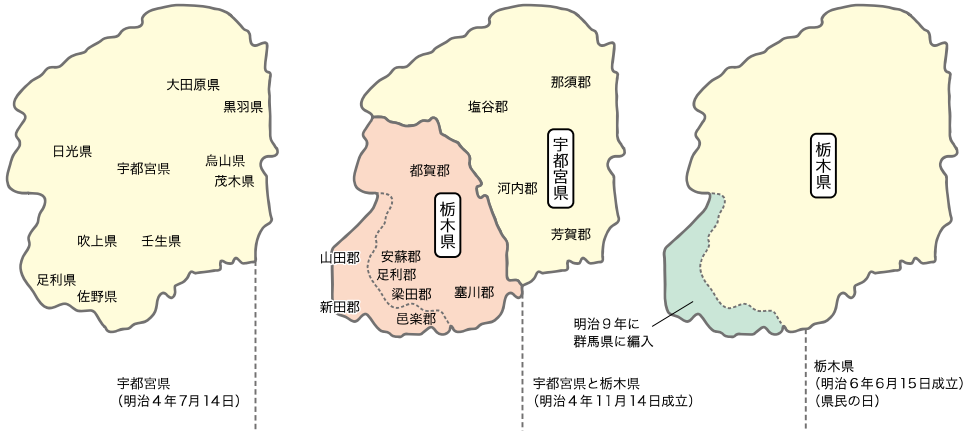
廃藩置県と県民の日

栃木県の変遷

1871（明治４）年７月の廃藩置県の結果、各藩の領域がそのまま県となり、当時栃木県内には10県ありました。同年11月になると、「栃木県」と「宇都宮県」の２県にまとめられました。1873年６月15日に「宇都宮県」が廃止され、「栃木県」がその領域を管轄することになり、ほぼ現在の県域となりました。この６月15日が、現在「県民の日」となっています。



↑❶廃藩置県後の栃木県のうつりかわり

宇都宮の産業革命と大嶋商舎

日本の産業革命は、繊維工業を中心とする軽工業からはじまりました。宇都宮においても、全国でもかなり早い時期にあたる、1871（明治４）年に、石井村に川村伝左衛門（辻叟）❷により製糸工場の大嶋商舎がつくられました。川村は、土地を開拓して桑園をつくり、育蚕室を建てました。製糸工場を新設し、鬼怒川の水を利用して、工場の操業を開始しました。良質の製品を生産し、殖産興業の模範工場であることから、1879年には前アメリカ大統領グラント、大隈重信や岩倉具視などが視察に訪れていました。

その後、1890年に三井家の手に渡り、1915年、機器類を群馬県の富岡製糸場（世界文化遺産）に移して、廃業となりました。

↑❷大嶋商舎での作業の様子

陸軍第14師団の駐屯

陸軍第14師団とは？

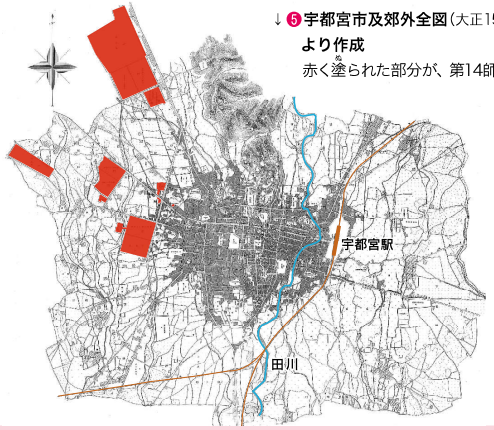
陸軍第14師団は、日露戦争後の軍備の増強に迫られ、新たに設けられた４師団のうちの一つになります。師団誘致運動の後、1907（明治40）年９月軍令により、宇都宮が第14師団の駐屯地となりました。

1908年３月、歩兵❶第66連隊が宝木（現宇都宮中央高等学校）❹の新兵営に入り、師団司令部は同じく宝木（現国立病院機構栃木医療センター）、師団長官舎は桜（現宇都宮地方合同庁舎）に、それぞれ施設が設けられました。騎兵❷第18連隊・輜重兵❸第14大隊は駒生（現作新学院高等学校・中等部・小学部・幼稚園）に、野砲兵❹第20連隊は鶴田（現文星芸術大学附属中・高等学校、宇都宮短期大学附属中・高等学校）、歩兵第59連隊は宝木（現とちぎ福祉プラザ付近）と、次々と陸軍の駐留が始まりました。❺野砲兵第20連隊から師団司令部を結ぶ「軍道」が整備され、道路の両側には桜が植えられ、「軍道の桜」❻と呼ばれました（現桜通り）。

第14師団は1919（大正８）年には、シベリア出兵に動員され、1927（昭和２）年には満州旅順へ出兵します。

1932年には満州に移駐し、満州事変、上海事変、南京攻略など各地を転戦しました。1937年に再び動員令により、中国戦線に投入され、1940年には、満州へ永久駐屯することになりました。

その後、1943年に第14師団は赤道近くの、パラオ諸島に派遣されましたが、そこで多くの兵士が犠牲となりました。アメリカ軍の侵攻によりパラオ諸島に残った部隊も、ほとんどが全滅してしまいました。



↓❺宇都宮市及郊外全図（大正15年11月発行）より作成
赤く塗られた部分が、第14師団の関連施設。

ことば

- ❶**歩兵**　戦場を徒走で戦闘する兵士。
- ❷**騎兵**　馬などの動物に騎乗して戦闘する兵士。
- ❸**輜重兵**　軍隊で使う補給物資の輸送を任務とする兵士。
- ❹**野砲兵**　大砲をとりあつかう兵士。

↑❸第14師団凱旋記念　絵葉書
1932年に満州移駐し、その後宇都宮に戻ってくる際に、その記念としてこの絵葉書が作られました。

↑❹宇都宮中央高等学校の赤レンガ倉庫
1908年、陸軍第14師団の設置に伴い、歩兵第66連隊の調理関係施設として建設されました。現在は、多目的ホールとして活用されています。

↑❻軍道の桜と桜通り
第二次世界大戦後は、「軍道」の名は廃されて、「桜通り」と呼ばれましたが、桜の老木化と道路の拡幅によって、桜は全て伐採されてしまいました。今は、桜通りという名前だけが残っています。

中島飛行機製作所の宇都宮進出

1942（昭和17）年に中島飛行機製作所が、現在の陽南１丁目の場所に進出してきました。工場面積は110万坪にもなり、宇都宮で最大の軍需工場でした。工場では、陸軍戦闘機「疾風」❶がつくられました。1944年には、本格的な生産を開始し、終戦までに、748機が生産されました。

→❶疾風写真
（毎日新聞社提供）

宇都宮につくられた軍需工場

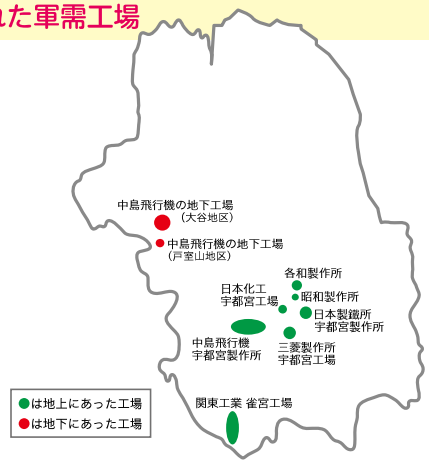
宇都宮と軍需工場❶

中島飛行機製作所以外にも、宇都宮には多数の軍需工場が進出してきました。❷機関銃弾を生産する工場、大砲の砲弾を生産する工場、航空機用発射連動機の試作研究を行うための工場、機銃の部品を作るための工場などがつくられ、社宅なども併設されていました。

太平洋戦争が本格化すると、労働力の減少から、学徒勤労動員が強化され、多くの学生が工場へ動員されました。

ことば

❶軍需工場
兵器や爆薬など軍事に必要な物資の生産・修理をする工場



↑❷宇都宮の主な軍需工場

宇都宮につくられた二つの飛行場

1 中島飛行機の飛行場

中島飛行機宇都宮製作所に付属する飛行場が、工場から約1.6km南の場所（現在の台新田町）に建設されました。南北の主要滑走路に加え、冬の西風を利用した東西の冬期滑走路をあわせもつ飛行場でした。工場で生産された飛行機は、飛行場と連結している誘導路を人力で押して運ばれ、テストを行った後に、各地の陸軍飛行場に向けて飛び立っていきました。現在は、陸上自衛隊駐屯地になっています。

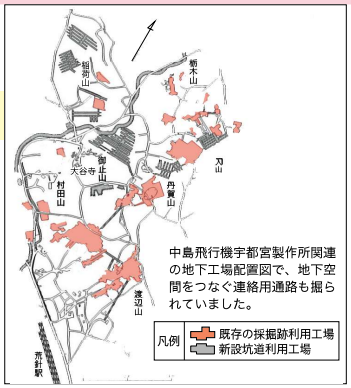
2 宇都宮陸軍飛行場

1939（昭和14）年、陸軍は宇都宮市郊外の清原村の約300haを買収しました。宇都宮陸軍飛行学校が発足し、1941年9月には、滑走路や、兵舎などを併設させた、陸軍宇都宮飛行場を完成させました。また、国鉄宝積寺駅から陸軍宇都宮飛行場までは、軍用鉄道路線が整備されました。昭和天皇や東条英機首相も訪れ、落下傘部隊と地上防衛軍の大演習も行われました。現在は清原工業団地などになっており、栃木県農業大学校内には、飛行機を守るためにコンクリートで作られた格納庫❸が、今も残っています。

↑❸栃木県農業大学校校内に残る掩体格納庫

大谷につくられた巨大地下工場

中島飛行機製作所の創業者中島知久平は、戦局の悪化や空襲の可能性を早い時期から予想しており、地下工場建設を進めていました。宇都宮製作所も分工場が進められ、大谷地区の採石場を借り上げて地下工場がつくられました。❹面積は57,846km²、設置機械数は1,012台、就業人員8,873人で、多数の機体の部品がつくられました。



→❹中島飛行機の大谷地下工場配置図

戦時下の宇都宮

1 学校の様子

1941（昭和16）年に、国民学校令が公布され、尋常高等小学校は国民学校に改称しました。宇都宮市内では、従来の中央、東、西、簗瀬、西原、戸祭、今泉、昭和の８つの国民学校に南と北の２校が加わり、10校となりました。宇都宮市内の国民学校でも、体錬科という授業では、戦争のための訓練なども行われました。❺

現在の中学校・高等学校にあたる、国民学校の高等科や中等教育学校では、1939年ごろは教育の一環として、勤労奉仕を目的とした農作業や除草を手伝うなど勤労作業が行われていました。しかし、1941年ごろになると、食料増産強化を目的として遠方まで長い期間動員されるようになっていきました。

太平洋戦争に突入すると、大量の兵士徴用による軍需産業の労働力の減少にともなって、学徒の労働力が求められました。1944年になると、動員先が農村から軍需工場へと変わり、通年にわたって学徒が勤労動員されるようになっていきました。また、軍需品増産のために、教育の場である学校も工場となり、女学生も動員されるようになりました。

▲宇都宮市における戦災の状況

←❺なぎなたの稽古
（現在の西小学校）

学徒勤労動員 体験談

私は、1937（昭和12）年４月に西原尋常小学校（現在の西原小学校）に入学した。1941（昭和16）年になると、国民学校と名称が変わった。

1943（昭和18）年、宇都宮南国民学校（現一条中学校）に進学した。２年生の秋ごろ、中島飛行機製作所に行くことになった。六道の辻から西原小の西に出て、南にまっすぐ行くと日光線の踏み切りがあり、日光線を越すと工場の北門だった。

始業は午前８時で終業は午後５時だった。工場の第15棟で、エンジンの枠を作った。プレスで型をぬく補助と、その部品のやすりがけが仕事だった。仕事場には男の指導者がいて仕事のやり方を教えてくれた。麦飯の弁当を食べ、根気のいる辛い仕事の毎日だったが、よくやれたと今になって思うことがある。時には残業もあり、仕事が終わると黒い干しバナナを２本ほどもらえた。砂糖などは手に入らない時代であったので、バナナは甘くてたいへんおいしかった。

仕事をしていて不安だったのは、空襲だった。空襲警報のサイレンが鳴ると仕事を止め、砥上の山まで全力で走って避難した。

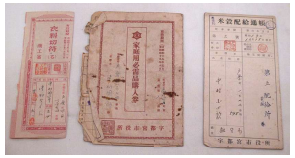
（『うつのみやの空襲』より）

2 市民の生活

戦争が長引き、日本国内では、物不足が深刻化していきました。政府は、「ぜいたくは敵だ」のスローガンを打ち出し国民に戦争に協力するように求めました。

宇都宮市も例外ではなく、米の配給が全国に先がけて、1940年７月から行われました（東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の６大都市での開始は1941年４月）。配給はその後、砂糖・マッチから味噌・醤油・衣類・燃料にまで広がっていきました。❻

下の写真は、宇都宮市が実際に発行した配給券です。左は「衣料切符」。中央は「家庭用必需品購入券」、右は「米穀配給通帳」です。食料や家庭での必需品はほとんど、切符や通帳による配給になっていきました。



↑❻実際に配布された配給券

宇都宮空襲で使用された爆弾

M47焼夷爆弾▶

M47焼夷爆弾

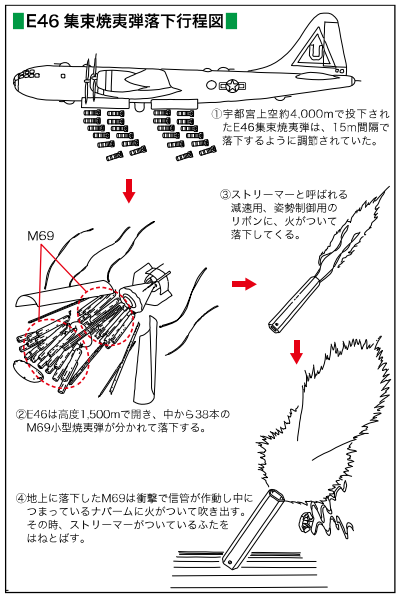
M47焼夷爆弾[1]は、爆発力と燃焼力を併せ持った爆弾です。宇都宮空襲では、後に続く爆撃機の目標となるように、先行した爆撃機から投下されました。目標地域の中心に投下し、大火災をおこさせ、後続機の目印となりました。宇都宮空襲で使用された爆弾は、10,500個、総重量は約362トンでした。

→❶ M47焼夷爆弾

E46集束焼夷弾

M69焼夷弾[2]を38個搭載したE46集束焼夷弾は、木造家屋が密集した日本の都市攻撃用に特に開発された焼夷弾です。M69焼夷弾の中にはナパームというゼリー状の油脂が入っており、地上に落下した衝撃で、ナパームが燃えながら広範囲に飛び散る仕組みになっています。[3]宇都宮空襲で使用されたE46集束焼夷弾は2,204個、総重量は約440トンでした。

→❷ M69小型焼夷弾



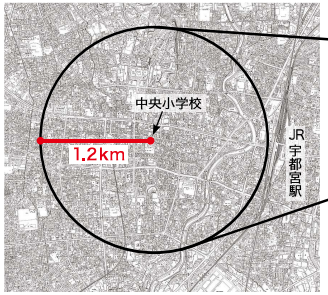
↑❸ E46集束焼夷弾落下工程図

宇都宮空襲の被害マップ

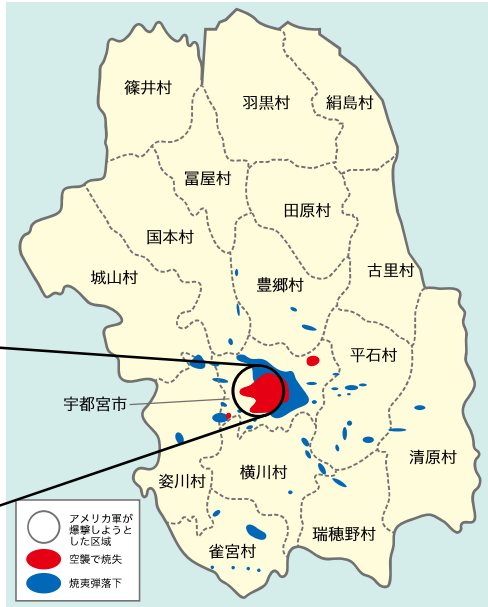
アメリカ軍による空襲計画

下の図の円は、半径1.2kmで、円の中心は現在の宇都宮市立中央小学校でした。[4]アメリカ軍は、この中心点を目標として爆弾を投下した場合、約半数がこの円の中に着弾すると予想していました。実際に多くの爆弾が、円の中に着弾しました。

市街地の中心地を目標としていることからも、宇都宮空襲が特定の軍事目標ではなく、あくまでも市街地をねらったものであることが分かります。



→❹ 投下の目標地点



空襲体験

「宇都宮空襲の記憶　未来へつなぐ」▶
平和啓発動画

1 リュックを背負った姉の死

空襲 体験談

当時、私の家は大銀杏の南側にあり、私は12歳であった。毎日警戒警報や空襲警報が発令され、不安な日々を送っていた。12日の夜も外へ明かりがもれないように、電灯を傘ごと黒布でくるみ、薄暗い中で夕食を食べた。夜中の11時ごろ、騒々しい音で目を覚ました。見ると父母と3人の兄達は、家財道具を裏の沼地へ投げ入れていたので、私と姉は、二人だけで隣組の防空壕へ避難した。しばらくすると、「早く外へ出て逃げろ！」と怒鳴る声が突然聞こえてきた。私と姉は、手を取り合って防空壕の外へ逃げ出した。赤々と燃え上がる火の間から、母の姿がぼんやりと見え、私は走り寄り、泣きながら母の胸にすがりついた。しかし、いつの間にか手を離してしまった姉の姿がどこにも無い。父が沼地に投げ込んでおいた2枚の畳を立て掛けて作った、三角形の「避難所」にもぐり込み、姉を待った。

やがて辺りが静かになったので、少しずつ畳の下から顔を出して、恐る恐る周囲を見渡すと、姉がすぐ近くで背中のリュックに寄りかかるようにして座っていた。「周子、何しているの？　早くこっちへおいで！」と母が声をかけたが、返事がなかった。母が医者を探し回ったが、とうとう見つからず、消防団の人にお願いして姉の様子を見てもらった。するとその人は、「死んでいます。」とすぐに告げた。私たちはなかなか信じられなかった。しかし、明かりの下で姉をよく見ると、額のはし辺りに指2本ぐらいのくぼみがあった。そしておなかの辺りには血が真っ赤ににじんでいた。焼夷弾の直撃を受けて、すでに息絶えていたのだった。次の日やっと見つけた荷車に姉の遺体を乗せ、みんなで火葬場に向かおうとしたとき、突然姉の体から血がポタポタ流れ落ち、下のコンクリートを染めた。それを見て、姉が最後の別れのしるしを私たちに残したように思えて、みんな声をあげて泣いた。

▶ お姉さんが背負っていたリュックサック

（『うつのみやの空襲』より）

2 母・妹は直撃死

戦争体験者による「語り部・語り継ぎ講演会」の動画▶

「宇都宮市平和親善大使広島派遣事業」啓発動画▶

空襲 体験談

私の家は、当時押切橋の東約100メートルの所にあり、裏には田川が流れていた。

12日の夜、午後11時を少し回った頃、飛行機が低空飛行をしてきたかと思うと、突然大きな音がして、専売局あたりが真っ光になった。その直後に空襲警報のサイレンが鳴った。窓の外は真っ赤で、すでに火の海だった。枕元にまとめておいた防空頭巾とカバンを身に付け、すぐに避難の用意をした。母は1歳の弟を背負った。妹は自転車とリヤカーを田川に投げ入れて戻ってきた。

ちょうどその時、真上に焼夷弾が落下し、一面火が広がった。私の着ていた服もくまなく油脂を浴び、すぐに燃えだした。私は夢中で外へ飛び出し、一人で逃げた。燃えている衣服の火を田川の中に入って消し、裸足のまま走った。途中、低空で飛んできた敵機から爆撃された。近くの自転車屋の横に積んであったタイヤの陰に隠れて避けた。そして、真岡街道の踏切を渡り、砂利道を夢中で走り続け、やっと田んぼの広がる所にたどりついた。

ほっと一息ついたとき、火傷の傷の焼けるような痛みが、急に襲ってきた。私は、田んぼの隅の水のある所に行って、燃え上がる市内の光景を眺めながら、じっとその痛みに耐えていた。

空襲がやっとおさまった頃、近くの農家の倉のそばでぐったりしていた私を、近所の人が、石井街道沿いの臨時救護所に運んでくれた。そこで応急処置をしてもらった後、今泉小学校に収容され、その後、国立病院(現)にトラックで移され、そこで治療を受けた。

やがて、父が私をやっと捜しあて、病院に駆け付けてくれた。その父から聞いた直撃後の状況は、次のようであった。

悲鳴を聞いて店先に駆け付けた父は、頭髪が燃えている小学生の弟を見付け、田川の中に投げ込んで火を消した。命は助かったが、翌朝、家の焼け跡で、母と妹・幼い弟の焼死体を発見した。妹は、大事なものを入れたリュックを、両手で抱えて死んでいた。遺体は見分けが付かないほど焼け焦げていたが、体の下になって焼け残っていたリュックの中身で、妹であることが分かった。そして、側に横たわっていた焼死体も、母と弟であることが確認できた。以上のような悲しい知らせだった。

その後、入院生活は秋の彼岸のころまで続いた。今でもあの時負った傷跡は、消えること無く残っている。

（『うつのみやの空襲』より）

八幡山につくられた地下司令部

八幡山の地下司令部▶（動画）

八幡山の地下司令部の建設

日中戦争がはじまると、1937（昭和12）年８月第14師団にも動員が命じられ、その後1939年７月に満州へ完全移駐となりました。その後本土決戦に備え、軍管区司令部が設置されるに伴い、栃木・茨城・群馬の三県を範囲とした、宇都宮師官区司令部が新たに設置されました。宇都宮師官区の部隊は、旧第14師団の施設を利用していましたが、各地で米軍機の空襲を受けるようになると、地下施設の必要性に迫られ、八幡山に地下司令部が建設されました。

地下司令部の建設は、1945年６月中旬から始められ、総勢250名ほどで、３交代24時間体制で行われました。八幡山のほとんどは、凝灰岩や泥岩の岩盤であるため、爆薬で爆破したのちに、ツルハシで掘り進み、土砂が運び出されました。総延長は721ｍにわたりました。

７月12日の宇都宮空襲の時も作業は継続され、終戦時は未完成で実際に使用されることはありませんでした。しかし、「米軍が進駐した時に笑われる、このままでは日本軍の名折れである」として作業は続けられ、全ての穴の貫通をもって作業は中止となりました。

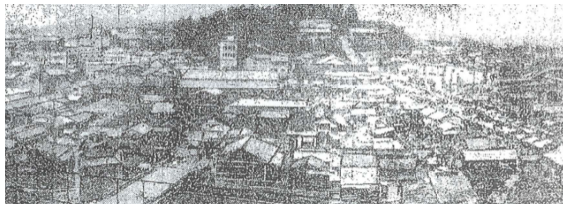
←❶地下司令部内には、部屋がつくられており、５部屋確認されています。作戦室や倉庫として使用予定であったと考えられています。

八幡山地下司令部▶

↓❷現在の八幡山の地下司令部の入り口部分
壁に柱を立てるくぼみや、床には左右に側溝がつくられています。

戦後復興する宇都宮

↑❸宇都宮市街地の復興　1945年11月　（下野新聞社提供）



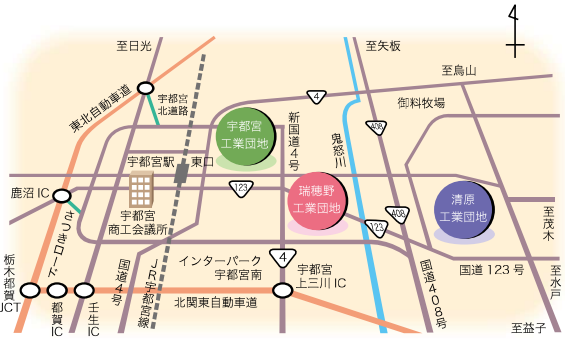
↑❹戦災復興１年後の宇都宮　1946年６月　（下野新聞社提供）

❸の写真は、終戦後すぐの11月に、中央国民学校屋上から、中心街を望んで撮ったものです。写真右下のバンバは焼野原となっていますが、露天商と人の姿が見られ、バンバを中心に復興していたことがわかります。

❹の写真は、❸の写真と同様の位置から撮影した、戦災一年後の写真です。バンバは戦前のたたずまいに戻り、露天の様子が見えます。大通りには、上野百貨店、足利銀行、下野新聞社の建物や、第一東宝（映画館）や建築中の民衆劇場が見えます。

宇都宮の工業団地の発展

宇都宮は、鉄道や高速道路、災害の少ない土地柄などの好条件に恵まれ、首都圏の北の拠点として成長してきました。その大きな要素となったのが、市内の３つの工業団地です。工業都市宇都宮を支える３つの工業団地を見ていきましょう。



↑❶宇都宮工業団地（平出工業団地）

1 宇都宮工業団地（平出工業団地）

宇都宮工業団地（平出工業団地）は、宇都宮市の東部に位置する、市内では最も古い工業団地です。業種別では、製造業が４割を超え、その他、卸売業、倉庫業、設備建築業、産業廃棄物業、商品販売業など、多様な工場があります。

2 清原工業団地

清原工業団地は、宇都宮市の東部地域で1971（昭和46）年から開発が進んできた工業団地で、開発当時は国内最大規模を誇りました。この団地にある企業は、東京に本社を置く大手企業が大半を占めており、化学工業、電気工業機械器具製造、輸送用機械器具製造などの、最先端の技術を持つ企業が進出しています。

3 瑞穂野工業団地

瑞穂野工業団地は、製造業の近代化や高度化を図るための移転用地として造られました。この団地は、市の南東部の新国道４号線沿いに造られており、交通の利便性も良い場所となっています。近年は、製造業以外にも、サービス業や建設業、卸売・小売業などの業種も増えています。

↑❷清原工業団地

↑❸宇都宮テクノポリスセンター地区
産・学・住・遊の各機能が有機的に結びついている。